マダガスカル研究懇談会ニュースレター

SERASERA 47

2022.07.28発行

表紙の写真

アンブシチャの土曜市

アンブシチャ Ambositra は「工芸品の町」です。土曜日の市には、帽子や手さげカゴ、布などの手仕事が並び、とても賑わっていました。この年は、町で知り合った中国系マダガスカル人に紹介してもらい、懇意にしているという民族集団ザフィマニリ Zafimaniry の木工職人や絹織物の個人工房などを取材しました。

また町の周辺にも手仕事の町が多く、木彫品の椅子などが並ぶアントゥエチャ Antoetra、野蚕の布ランバメーナ lambamena などを売るサンヂャンダヒ Sandrandahy、ラフィアヤシのバッグや帽子などが揃うファンヂィアナ Fandriana の市なども撮影して回りました。最近はどんな新しい手仕事が並んでいるのか、また訪ねてみたい市ばかりです。

撮影年：1997 年
撮影場所：フィアナランツア(fianarantsoa)州アンブシチャ

撮影者：堀内　孝

目次

表紙の写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第 25 回　総会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第 25 回　懇談会（大会）講演 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第 25 回　懇談会（大会）講演 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

マダガスカル活動奮闘記　20 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

生き物図鑑　26・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

Moi et Madagascar　26・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

マダガスカルのことわざいろいろ　29・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

日本で作ろう！マダガスカル料理　42・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

マダガスカル研究懇談会会則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

第 26 回懇談会（大会）のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

原稿を募集しています・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

2022 年度世話役・事務局・編集部・会計監事　・・・・・・・・・・・・ 56

奥付　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

第 25 回　総会報告

2022 年 3 月 26 日（土）、Zoom を用いたオンラインで、第 25 回マダガスカル研究懇談会が開催され、38 名（うち会員 31 名）が参加しました。研究発表に引き続いて行われた総会には 26 名が参加し、以下の事項についての報告と審議がありました。役員の改選はありませんでした。

【2021 年度の活動】

2021 年度の懇談会（大会）は、2021 年 3 月 27 日（土）に Zoom を用いたオンラインで開催され、参加者は 38 名（含む演者 2 名）、総会出席者は 32 名でした。

『マダガスカル研究懇談会ニュースレター SERASERA』は、44 号と 45 号の編集を行い、電子媒体で発行しました。

2021 年 12 月 31 日の時点での会員数は、122 名でした（前年度から 4 名の増加）。

【2021 年度の決算報告】

収入として年会費 158,000 円、利息 6 円、その他（寄附）1,000 円の合計 159,006 円がありました。年会費収入が多かったのは、2019 年までの会費未納者に催促し、多数の振り込みがあったためです。

これに対し支出として、消耗品費（文具）193 円、年会費の未納金や過払いの通知に使われた郵送費 5,880 円、ホームページ運営費 3,300 円、振込手数料 1,100 円、その他（過払い会費返却）15,000 円があり、合計は 25,473 円でした。この結果、当期収支は 133,533 円の歳入増となり、次年度への繰越金は、2020 年度の 1,003,216 円から、1,136,749 円に増加しました。

この収支決算は、会計監事の杉本星子氏と平野智巳氏から「適正」との監査を受けました。これらの報告を受け、2021 年度の決算報告が総会で承認されました。

【2022 年度の予算案】

提出された 2022 年度予算案の収入合計は前年度繰越金 1,136,749 円でした。会費未納金の振込みがほぼ見込めないこと、3 月に開催する大会がオンライン開催となったために大会参加費の収入がないことから、2022 年度の収入は前年度繰越金のみとなります。

一方、各支出費目は、消耗品代 2,000 円、ホームページ運営費 4,000 円、振込手数料 1,000 円、過払い会費の返却 3,000 円および予備費 1,126,749 円となります。なお、過払い会費の返却は、2021 年度中に連絡がつかなかった 1 名に対するものです。

この予算案は、総会で承認されました。

【次回の懇談会大会の予定】

次回大会が、2023 年 3 月 25 日（土）に京都大学稲盛財団記念館で開催される予定であることが報告されました（詳細は、51 ページの大会案内記事をご参照ください）。

第 25 回　懇談会（大会）講演 1

マダガスカル共和国における
口唇口蓋裂医療協力の 9 年間を振り返って

慶應義塾大学　医学部　形成外科学教室　土佐 泰祥

1.マダガスカル口唇口蓋裂医療協力との出会い

ご縁とは不思議なものである。2010年12月20日に作家の曽野綾子先生から一本のお電話を頂戴した。「土佐先生、今週の金曜日に我が家で朱門（ご主人様）と一緒に夕食はいかがですか？」カレンダーを確認すると、金曜日はクリスマスイブである。「朱門」（ご主人様）とは文化庁長官の三浦朱門先生である。偶然私の父の旧制高等学校のクラスメートで大親友であった。クリスマスイブのお食事の前に曽野先生がリビングルームで大きな地図を拡げられた。

曽野先生から「土佐先生、マダガスカルっていかれたことございますか？」とその大きな地図を見ながら尋ねられた。「いえ、ございません。」とお答えし、「実はマダガスカルに日本人シスターがお勤めの病院があり、口唇裂の治療をできる人がいなくて困っているらしいんですが、ご専門の口唇口蓋裂の手術を海外でなさるのはお嫌ですか？」と切りだされた。「全然嫌ではないです。」この時の会話がこのミッションのルーツそのものとなった。その後、外務省をはじめ、当時准教授として勤務していた昭和大学の先生方、本事業の発起人の曽野先生など関係者の皆様の大変なご尽力により本ミッションが現実のものとなっていった。

図1 本事業発起人の作家曽野綾子先生（右）と筆者（左）
（マダガスカル イヴァトゥ Ivato 国際空港にて）

2.東日本大震災発生の直後となった初回マダガスカル共和国入国

第 1 回目となるマダガスカル口唇口蓋裂医療協力が、2011 年 5 月 28 日に出発予定となった。色々な準備を進める中、何度か曽野先生のご自宅を訪問させていただいた。出発に際し、万が一クーデターなどが発生したとしたら、どのように対応するのが良いか、そのためには予め何をしておくべきかといった手配までして下さっていた。出発直前の 2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に、何の前触れもなく突然岩手沖を震源地とした東北地方太平洋沖地震による東日本大震災が発生した。そして、さらにその後の福島第一原子力発電所で起こったメルトダウン事故は INES（国際原子力事象評価尺度）7 段階でのレベル 7 という大変深刻な大惨事となった。われわれの医療物資も放射能汚染があるのではないかという問い合わせを非公式に受けた。放射線科教授に radioactive contamination free（放射能汚染無し）と記載していただいた用紙を、持参する医療物資の全部の箱に貼付した。出発が危ぶまれる中、同年 5 月 28 日に麻酔器を含めた 120 個、1.5 トンの荷物と共に（図 2a,b）全日空とマダガスカル航空を利用してタイのバンコク経由で（図 2c）、マダガスカルの首都アンタナナリヴ Antananarivo に無事到着した。イヴァトゥ国際空港には在マダガスカル日本大使館の職員の方々や病院の皆様がお迎えくださり大変恐縮した（図 2d,e）。

図2a 成田国際空港出発に際し、梱包済みの麻酔器について
開封してパーツを含めて航空法に抵触しないか確認を受ける

図2b お見送りに来られた三浦朱門文化庁長官（右から2番目）と参加者
成田国際空港にて120個、1.5tの荷物の前で

図2c バンコク国際空港の電光掲示板

図 2d イヴァトゥ国際空港(2019 年時の迎えのスタッフ)

図2e イヴァトゥ国際空港のターンテーブル
手前の男性は在マダガスカル日本大使館員

3.マダガスカル口唇口蓋裂医療協力が始まる

マダガスカル共和国での活動拠点はアヴェ・マリア病院 Clinique Ave Maria で、マダガスカル第 3 の都市アンチラベ Antsirabe に位置している（図 3a)。そこは曽野先生が新聞連載小説として好評であった『時の止まった赤ん坊』1984 年の舞台となったところである。

主人公の入江茜さんは、実在したシスター遠藤能子氏をモデルにしたものである。曽野先生ご自身も実際ここの病院内に泊まりこんで、現地取材で制作に当たった作品である（図 3b）。

図3a アヴェ・マリア病院

図3b 『時の止まった赤ん坊』

図 3c 診察を待つ患者さんとご家族（アヴェ・マリア病院中庭にて）

病院に着くと100名以上の患者さんがすでに待っていてくださった（図3c)。

図4a 診療風景

図4b 手術室にて

図 4c　術後食事中の患者さんとご家族

病院まで来て下さった患者さん全員の診察を行った上で、体重や全身状態などの総合判断で手術適応の可否が決められていった。1年目にはこちらで検討した手術可能の条件をクリアできた32名の手術を実施した（図 4)。筆者はここで手術するのは初めてであり、全例

の手術を無事安全に終えることができたことに、関係して下さった皆様に感謝を感じた。現地スタッフから「来年も絶対きて下さいね。皆待っていますよ。」と言っていただき、全く新しい事業は良いスタートを切ることができた。

現地までの移動ルートは、当初は東京からは全日空で、バンコクでマダガスカル航空に乗り継ぐルートであった。その後、マダガスカル航空の路線縮小の影響を受けてルートはエールフランスのパリ経由に代わった。協力機関は当初海外邦人宣教者活動援助後援会 JOMAS (Japan Overseas Missionary Activity Sponsorship)という団体から笹川保健財団に移り、2019 年末に初めて報告された新型コロナウィルス(COVID-19)感染症（以下コロナ）で渡航が不可能になるまでの 9 年間、継続したプロジェクトとなった。気がついたら手術件数は、9 年間の総計で 191 件を数えた。術前は視診、触診、聴診など古典的な診察が中心であるが、関係者の皆様に支えられ、再手術はゼロ、事故もゼロを継続中である。また、低栄養状態の患者さんが大半を占めるこのような地域での症例群では、創傷治癒力に不安を残すことが少なくない。初回口蓋裂に対する口蓋形成術を 44 例執刀した。口蓋裂の三大合併症の 1 つに術後口蓋瘻孔がある。口蓋瘻孔というのは、口蓋（口腔内の天井）に穴が開いている場合で、先進国でも 10%以上の報告が多いようであるが、今回のミッションでは連続 44 例で瘻孔発生は 0 例でこちらも継続中である（図 5）。この数字はこの医療チームが一丸となり、マダガスカルの子どもたちに笑顔と元気が戻って、その連鎖が起こってくれればという信念の現れかと思われる。

図5a 手術風景(2019年

図 5b 初回口蓋形成術の術後の口腔内

4.参加学生の現地での体験

この医療協力の途中から毎年、医療系学生（昭和大学の医学部 5 年生、歯学部 5 年生、薬学部 5 年生、保健医療学部 3 年生の 4 名）も同行するようになり、マダガスカルの地で、チーム医療や僻地医療を寝食をともにしながら学習するという現地参加型実習を一緒に実践してきた。参加してくれた学生は口々に、「マダガスカルでのこの医療協力に参加させていただき、日本では考えもつかない経験が沢山出来た。今後卒業後は医療系の仕事をしていく上で、ここでの体験を色々な場面で生かしていきたい。」などの感想を話してくれている（図 6）。

図6a,b　参加医療系学生の地元患者さんとの交流(a左:建物内で b右:病室で)

図 6c 口唇口蓋裂関連の講義を受ける医療系学生

5.現地医師の医育の重要性と実践

図 7　MANDRANO Nirina 医師 2011 年助手（上左）、同 2019 年執刀医（上中）、筆者執刀（地元見学者への指導）（上右）、Nirina 医師への口蓋裂手術の指導（下左）、Nirina 医師執刀（下中、右）

2011 年 5 月 28 日からの第 1 回目のミッションの時にアヴェ・マリア病院に見学に来た国立アンタナナリヴ大学医学部のマンヂャーノ・ニリーナ・アドリアン・ジャン・ヴィヴィエ（MANDRANO Nirina Adrien Jean Vivié, Université d'Antananarivo / Faculté de Médecine)という若い医師が、ここで見学した手術手技を日本に行き学びたいとの強い希望があった。真剣に学びたいという強い気持ちが伝わってきていたため、上司と相談の上、受け入れを快諾した。2012 年 4 月に来日した際、羽田空港にお迎えにいった。来日後は、奨学金の申請のお手伝いもさせていただき、形成外科医として基本的手技から応用実践までを一緒に学んでいけるような体制作りも行なった。ニリナはメキメキと口唇口蓋裂治療の知識も技術も、そして日本語も上達して片側の口唇裂や口蓋裂、両側の口唇裂や簡単な口蓋裂は一人で執刀できる実力を備えていた（図 7)。

図 8　日本に留学し一緒に学んだ医師、歯科医師とチーム参加者で（左)、MANDRANO Nirina 医師と筆者（右）

現地の医師を含めた医療従事者への教育とともに、決して上から目線でない良好な交流が大切であることはいうまでもない。私自身も外国人にこんなに濃厚に手術手技を伝授す

る機会は初めてであり、大変勉強になった。医学博士の学位取得も果たして帰国した。帰国後も、今まで手術をしてきた患者さんの術後の経過観察や、筆者らが参加するミッションの直前の患者さん情報の収集準備をしてくださり情報共有ができて非常に良好な関係である。

6.アンタナナリヴ大学医学部の訪問

筆者は、このマダガスカル口唇口蓋裂医療協力参加の際に、ミッション終了後、日本への帰国前にアンタナナリヴ大学付属外科系病院講堂での特別講演を継続的に行ってきている（図 9）。

図 9　アンタナナリヴ大学付属外科系病院講堂での特別講演風景

COVID-19 で訪問ができなくなる前年度まで、難治症例の診察や治療方針のディスカッションを現地の先生方と行い、友好的な交流をもたせていただき、その後医学部長への表敬訪問も毎年させていただいてきている（図 10a）。

図 10a アンタナナリヴ大学医学部長(訪問当時)サムソン ルク ヘルヴェ教授への表敬訪問

図 10b 厚生大臣（筆者の左隣）と夕食後の集合写真

また、厚生大臣とも毎年お食事を共にさせていただき、人的交流の継続もご縁をいただいている。毎年和やかな雰囲気の中、両国の医療の実状のお話を共有させていただく貴重な夕食会となっている（図 10b）。

7.外務省からのサポート

歴代のマダガスカル駐箚特命全権大使閣下であられた川口哲郎大使、細谷龍平大使、小笠原一郎大使による手厚いサポートに深い感謝を感じている。そして、このミッション終了後に、毎年在マダガスカル日本国大使公邸への表敬訪問と報告会をさせていただいてきた（図 11）。

図 11 小笠原前マダガスカル駐箚特命全権大使閣下ご夫妻と大使公邸の庭園にて(左)
大使公邸内での集合写真（右）

8.現地でのマスコミ取材

外務省をはじめ関係部署の皆様のご尽力で、地元プレス関係へ医療協力活動状況をご報告する機会を得て、全土にテレビや新聞でこのミッションについて友好的に報道された（図12）。

図 12　地元テレビ局からの取材（左）、地元新聞 MIDI などの記事（右）

日本では、BS フジのガリレオ X という番組で、「密着マダガスカル医療協力活動-子どもたちの笑顔と現地医師の育成-」というタイトルで放映してくださり、現在 YouTube での視聴が可能となっている。

9.考察

口唇口蓋裂を中心とした低-中所得の国々Low and Middle Income Countries(LMICs)への国際医療協力は、経験と技術を有する医師、歯科医師が、関連スタッフとともに必要な医療器具を持参して現地に赴くことで遂行されてきた。国家間の移動は、ビザの発給や必要な予防接種を受けることで比較的容易であった。私自身９年間マダガスカル医師会にも所属させていただいた。しかし、コロナは、強い感染力で瞬く間に世界中に拡がり、国境を超えた医療協力活動に大きく立ち開かっている。現地医師の医育の機会に恵まれてきたことがここで生きてきている。海外渡航が難しい中、医育を介して技術知識を共有してきた現地医師が、口唇口蓋裂の至適時期を迎えた患者の治療を行い現地での要になってくれているようである。

謝辞

本プロジェクトにご支援を賜りましたすべての関係組織、関係者の皆様に深く感謝をいたしております。

第 25 回　懇談会（大会）講演 2

マダガスカルの市場と手仕事

写真家　堀内　孝

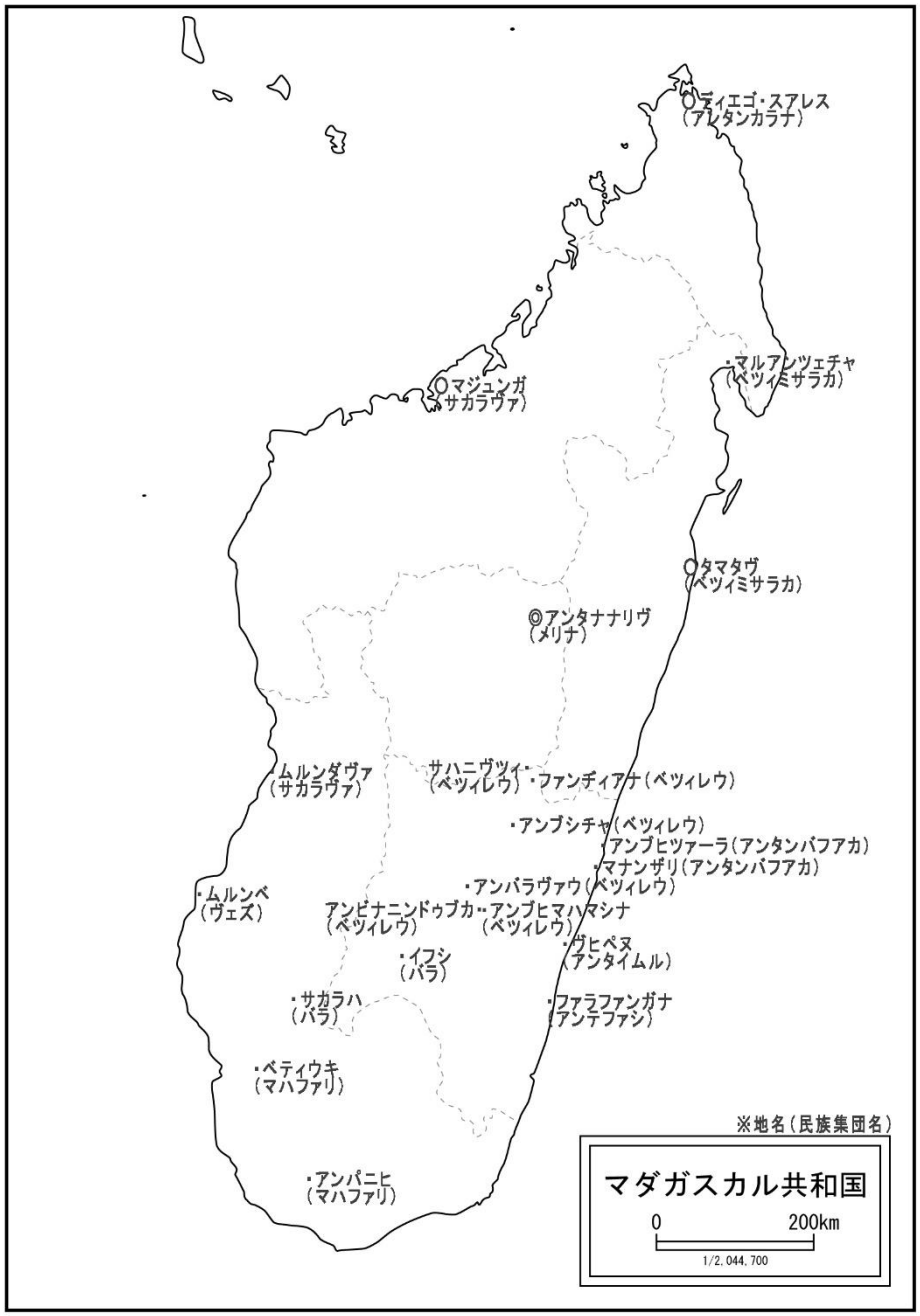


図 1　本文中で言及されている地名と民族集団名

アンタナナリヴ

マダガスカルを初めて訪れたのは 1990 年です。当時、首都アンタナナリヴ Antananarivo では金曜日になるとズマ zoma と呼ばれる市が立ちました。イメリナ Imerina 王国時代から続く定期市で、スアラヌ Soarano 地区の駅前からのびる独立大通り周辺には、野菜、鶏、古着、日用雑貨、土産物などを扱う数百件の露店が並びました。アナラケリ Analakely 地区一帯が白いパラソルで埋め尽くされる風景は圧巻で、その賑わいと熱気に息を飲みました。

フランス植民地時代に建てられたパビヨン pavillon と呼ばれる建物内の店舗を見て歩くのも楽しみでした。米屋に 10 種類以上の米が並び、肉屋には手作りのソーセージがすだれ状にぶら下がっていました。野菜も豊富で、色とりどりの新鮮な高原野菜が揃っていました。アフリカなのにカキ、ミカン、ビワなどアジアを思わせる果物があるのも新鮮でした。

図 2 アナラケリにあるパビヨン周辺の様子　2000 年

パビヨン内にはさらに興奮しました。薄暗く、細い道が迷路のように走り、区画を曲がるごとに、カゴ、刺繍、木彫品など次々に手仕事の店が現れるのです。またアナラケリの一角で出会ったランバメーナ lambamena（二次葬祭ファマディハナ famadihana で使われる野蚕の布）の独特の風合いにも惹かれました。地域の物産が集まり、様々な手仕事が並ぶアンタナナリヴの市場との出会いをきっかけに、マダガスカルの市場と手仕事に興味を持ち、各地を訪ね歩くようになりました。

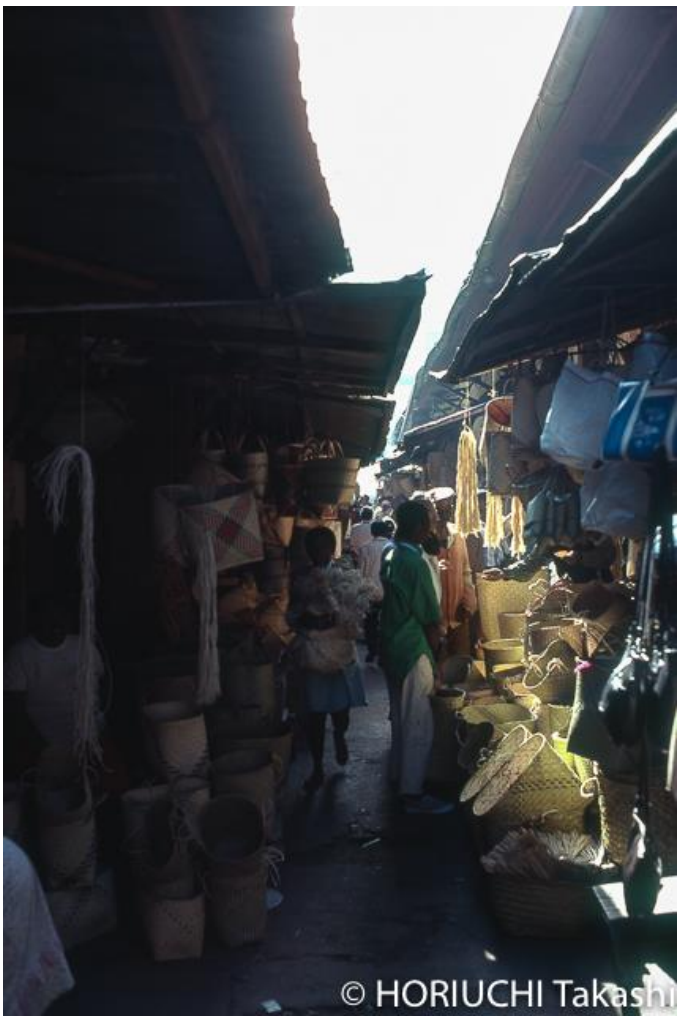


図 3　手仕事の店が並ぶアナラケリのパビヨン内の様子　1990 年

中央高地

中央高地で最も魅力的なのはアンブシチャ Ambositra の町の市場かもしれません。毎週土曜日に開かれることから「土曜市」（ツェーナ・アサブツィ tsena asabotsy）と呼ばれます。頻繁に訪れた 1990 年代終わり頃は、通りに米や野菜、日用雑貨はもちろんのこと、手作りの帽子や手さげカゴ、布製品、木彫りの椅子などがたくさん並んでいました。まさに町のキャッチフレーズにもなっている「手工芸品の首都」でした。

この町で最も知られているのは木彫品です。町中には数件の木彫品専門店があり、それぞれに工房を構えていました。工房にはこの地域に住む民族集団のベツィレウ Betsileo の職人や木工技術に長けた民族集団のザフィマニリ Zafimaniry の職人がおり、土産物用の木彫りの像から食器、家具まで多彩な品々を製作していました。

図 4 アンブシチャにある木彫品の工房　1997 年

アンブシチャの町から南西に 42km 行ったアントゥエチャ Antoetra 村では、ユネスコの無形文化遺産にも登録されているザフィマニリの木工技術を見ることできました。村には伝統的な木造家屋が並び、窓に緻密な幾何学模様のデザインが施されていました。室内にある椅子や衣装箱、はちみつ収納箱も手作りで、同様のデザインが彫られていました。帽子、ゴザ、カゴなど生活に必要な道具は女性たちによる手仕事でした。

アンブシチャ周辺は布作りも盛んです。近くに広がるタピア tapia（*Uapaca bojeri*）の樹の森にランディベ landibe と呼ばれるカレハガが自生しており、野蚕が採れるのです。棘のあるユニークな繭の収穫は 5 月と 12 月の年 2 回。女性たちは、6 月から 9 月頃に行われるファマディハナに合わせて糸を紡ぎ、ランバメーナを織っていました。訪れた 2000 年頃の値段は 1 枚 20 万フランマラガシ（約 3400 円）。「田舎の農民はとても高くて手が出ません。買うのは、都会の人やビジネスで成功した人が多いですよ」とサハニヴツィ Sahanivotry 村の織り手は話していました。

またアンブシチャから 50 キロほど北にあるファンディアナ Fandriana も手仕事の町として知られています。綿、絹、野蚕の布のほか、ラフィアヤシ rofia を使った質の高い帽子やタペストリーなども作っていました。

図 5　アンバラヴァウで行われる牛市　1998 年

中央高地ではアンバラヴァウ Ambalavao の町の市場もおもしろいです。週に一度、周囲に山々が連なる高原で、大規模な牛市が行われるのです。牛はこの町の南にあるイフシ Ihosy やサカラハ Sakalaha の町、さらには南部のアンドゥイ Androy 地方から運ばれてきます。皆、１～２週間のキャラバンを組んでやってくるそうです。訪れた 1998 年は水曜日に行われており、1500 頭を超える牛が集まっていました。同時に開かれていた市も規模が大きく、土鍋やゴザ、手さげカゴなどベツィレウの人々の優れた手仕事が並んでいました。ヒューズの切れた電灯を使った灯油ランプなど、不用品を上手に再利用したマダガスカルならではの商品もあり、目を引きました。

この地域でも布作りが行われていました。アンバラヴァウから車で１時間のところにあるアンブヒマハマシナ Ambohimahamasina 村の月曜日の市を訪ねると、サリンブ sarimbo と呼ばれる布が売られていました。昔は野蚕で織っていたそうですが、現在は綿が使われていました。染色は天然染料を使用しています。近くにあるアンビナニンドゥヴカ Ambinanindovoka 村では、キニニナ・メナ kininina mena の葉で茶、泥で黒、タムタム tamotamo（ウコン）で黄、ヴング vongo の木の皮でこげ茶に染めていました。

図 6 アンブヒマハマシナで売られていたサリンブと呼ばれる布　1998 年

アンバラヴァウはアンタイムル Antaimoro 紙の生産でも知られています。マダガスカル南東部に住み、アラブ起源との伝承を持つアンタイムルの人々が使っていたとされる紙です。この町にその技術を持ち込み工房を開設したのはフランス人です。材料はアヴハ avoha と呼ばれる木を使っています。それを煮て、繊維をつぶし、水に溶いて漉いていきます。最後に花をあしらって乾燥させれば出来上がりです。レターセットや本、ランプシェードなどに加工されて売られており、今ではこの町を代表する手仕事になっています。

東海岸

東海岸地方は貿易風の影響を受け、ほぼ一年中雨が降ります。市場には豊富な野菜類のほか、バナナやオレンジ、パパイヤ、カスタード・アップル（ギュウシンリ）、ジャック・フルーツなど、多種多様な果物が並んでいました。中でも人々が楽しみにしているのがライチです。11 月頃に市場に並び始めると、カゴいっぱいに買い求め、季節の味を思いきり堪能していました。

市場では海よりも川の魚を多く見かけました。特にウナギは大きく、直径 10 センチ近いものもありました。またアラブ起源の伝承を持つアンタイムルの人々が住むヴヒペヌ Vohipeno の町では、訪れた 2001 年、豚肉は禁忌のため市場では売られていませんでした。

図 7　カラフルな手さげカゴや帽子が並ぶタマタヴの市場　2001 年

東海岸は中央高地と並んで手仕事が盛んなところです。タマタヴ Tamatave の町の市場には、各地から集められた様々な種類の手さげカゴや帽子が並んでいました。

1999 年に訪ねた北東部のマルアンツェチャ Maroantsetra の町では、この一帯に広く住む民族集団のベツィミサラカ Betsimisaraka の女性たちが、郊外で採ってきたラフィアヤシを裂き、ひも状に加工していました。家の軒下で、乾燥させたラフィアヤシの繊維を使い、複雑なデザインの帽子を編んでいる女性もいます。染色したペンザ penja（カヤツリグサ科）を材料に、カゴを編む女性もよく見かけました。カラフルですが、派手すぎず、どれもマダガスカルらしい優しい色合いです。マルアンツェチャは、材料が豊富で、熟練の技術を持った女性が多いため、タマタヴやアンタナナリヴの業者から多くの発注があるそうです。南東部のヴヒペヌやファラヴァンガナ Frafangana の町の市場でも、シンプルながら質の高い手さげカゴやゴザを数多く目にしました。

図 8 ラフィアヤシの帽子を編むベツィミサラカの女性　1999 年

またマナンザリ Mananjary の北にあるアンブヒツァーラ Ambohitsara 村では、この地域に住む民族集団のアンタンバフアカ Antambahoaka の女性たちがラフィアヤシの布を織っていました。7 年に一度行う割礼祭サンバチャ sambatra で、男性が貫頭衣として、女性は巻きスカートとして着用するそうです。

西海岸

西海岸は暑く乾燥していますが、地域によって雨量に差があり、市場の様子も様々でした。北西部のマジュンガ Majunga の町の市場は食材が豊富で、中でも魚やカニ、エビの多さに驚きました。川の河口に位置するうえ、周辺にマングローブが発達しており、豊富な魚介類が獲れるのです。この地方の市場が最も華やぐのは 11 月のマンゴーの季節です。地域によって様々なマンゴーが採れますが、最も美味しいと言われるのがディエゴ・スアレス Diego Suarez の町の名称に由来するマンガ・ディエゴ manga diego です。またマンゴーで作るアシャール（インド系料理に由来する酢漬け）achard も名産で、これはマジュンガがよく知られています。

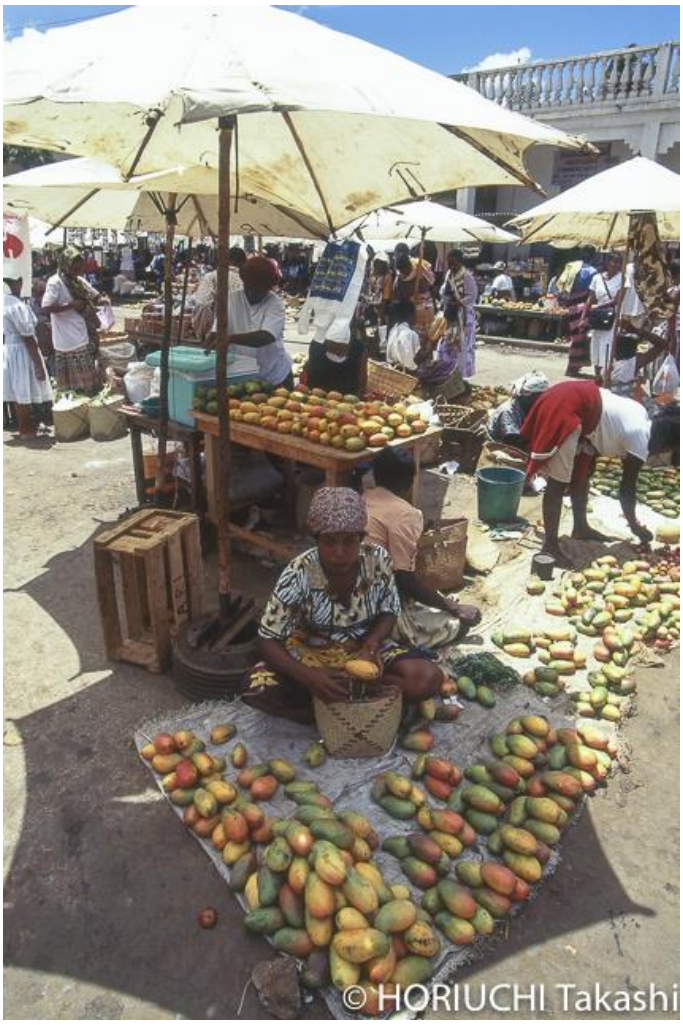


図 9 特産のマンゴーが並ぶディエゴ・スアレスの市場　1998 年

マジュンガの市場には日常使いの手さげカゴや箕などに加え、ラフィアヤシの帽子やバスケット、バッグなどが売られていました。東海岸とはまた違った色合いで、デザインも洗練されていました。この地方もラフィアヤシの産地が多く、材料がこの町に集まるのだそうです。このほか、ヤシの一種のサチャナ satrana を使ったマットなども作られていました。

また南西部のムルンダヴァ Morondava やムルンベ Morombe の町の市場では、バオバブの果実や樹皮などが売られていました。果実は水に溶かしてジュースに、樹皮はロープなどに使われます。ロープは樹皮を裂き綯って作りますが、非常に耐久性が高いのが特徴です。

図 10 バオバブのロープを綯うヴェズの男性、ムルンベ　2011 年

南部

南部は西海岸以上に暑く乾燥しています。ベティウキ Betioky の町の火曜市を訪ねると、南西部に暮らす民族集団のマハファリ Mahafaly の女性たちが、トウモロコシやマニオク、サツマイモなどを売っていました。雨が少ないため、この地域では米が穫れないのです。生魚は見当たらず、牛肉や山羊肉などが並んでいました。マハファリや南東部に住むアンタンドゥイ Antandroy の人々が飲むというハブブ habobo もありました。牛乳を発酵させて作ったヨーグルトのような食べものです。ほかの地域に比べて薬草の種類が群を抜いて多いのも目につきました。

敷地の一角に手さげカゴやゴザなどを売るスペースがありました。どれも普段使い用の素朴な手仕事です。自分で作る人も多く、材料のカヤツリグサがたくさん揃っていました。隣接した広場では山羊市が開かれ、その一角に新品の牛車が並んでいました。交通手段の乏しい南部では、牛車は生活に欠かせない道具です。鉄の箍が付いた木製の車輪タイプが 1 台 12 万アリアリ（約 3500 円）で売られていました。

図 11 ベティウキの市場で売られていた牛車と台車　2011 年

この町にアール・マハファリ art Mahafaly という木彫品の工房があります。土産物の木彫品やマハファリの人々が先祖を弔うために墓に立てる墓標、アルアル aloalo の制作を行っているところです。以前訪ねた時は質の高い木彫品がたくさん並んでいたのですが、2018 年に訪ねると作品の数が少なくなり、質も落ちていました。森林伐採で森がなくなり、材料が手に入らなくなったのだそうです。「これが最後の作品になるでしょう」とオーナーは寂しそうに話していました。

さらに南にあるアンパニヒ Ampanihy は、南部随一の手仕事の町として知られます。特に有名なのがアンゴラ山羊の絨毯タピモヘア tapis mohair です。とある民家を訪ねると、女性が軒下で絨毯を織っていました。絨毯にはマハファリ固有のデザインが施されています。糸は森から採ってきたスムツァーラ somotsara という植物で染めていました。きれいなこげ茶色が出るそうです。横 1.5 メートル、縦 2.5 メートルのサイズを織るのに約 1 ヶ月かかり、それを 20 万アリアリ（約 5700 円）で販売していました。「最近はアンゴラ山羊の毛が手に入りにくくなり、違う品種の羊毛や綿で織る人が多くなっています」と織り手の女性は話していました。

図 12 アンゴラ山羊の絨毯タピモヘアを織る女性　2018 年

アンパニヒの市場には、マンディアヴラ mandiavola という布も売られていました。布は黒、こげ茶、青などを基調としており、それぞれに紫や黄などのストライプが入っています。ようやく見つけた織り手の女性は庭に数メートルの織機を据えて作業をしていました。普段は綿を使って織っていますが、8 月に野蚕が採れるので、注文があればそれを使うこともあるそうです。1 枚織るのに 1 週間かかり、2 枚 1 組を 2 万アリアリ（約 630 円）で売っていました。一般に儀礼で使われることが多いそうですが、その女性はワンピースやテーブルクロスに仕立てるなど、様々な工夫をしていました。

図 13 アンパニヒの市場で売られていたランバ・マンディアヴラ 2000 年頃

マダガスカルは非常に大きく、地域によって気候も民族集団も異なります。市場にはそれぞれの地域の環境や人々の暮らしが反映されており、どこを訪ねても新しい発見があって見飽きることがありませんでした。中でも手仕事は、地域の素材を上手に生かしており、デザインのセンスも良く、非常に優れているものが多いと感じました。最近では欧米の有名ブランドも注目するなど、世界中から高い評価を得ています。日本でも、マダガスカル産のラフィアヤシの帽子やバッグなどが簡単に手に入るようになったのはうれしいことです。

一方で、ラフィアヤシや野蚕などの材料が、気候変動や産地の森の伐採などで手に入りにくくなってきています。マハファリのアルアルやタピ・モヘヤについてもご紹介した通りです。それを食い止めようと各地で NGO などが知恵を出し、地域住民とともに産地の保護や保全活動を始めています。同時に、マングローブ林で採れる山繭を使った布作りなど、なくなりつつあった手仕事を復活させようとする取り組みも出てきています。

マダガスカルにはまだまだ知られていない手仕事がたくさんあります。機会があればまた新しい市場を訪ね、優れた手仕事を探し出し、記録し続けていきたいと思っています。

マダガスカル活動奮闘記　20

コロナ禍でのマダガスカル渡航奮闘記（往路編）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 佐藤 宏樹

私たちは京都大学とアンタナナリヴ（Antananarivo）大学を中心とするメンバーで調査隊を結成し、マダガスカル北西部のアンカラファンツィカ（Ankarafantsika）国立公園で30 年以上にわたって生物学・環境学の調査を継続している。私自身は 2005 年から調査隊に参加し、動植物の生態学研究を中心に調査を繰り返してきたが、2020 年 3 月の帰国を最後に、2 年弱に渡ってマダガスカルへ渡航できずにいた。2021 年 10 月、現地入りしていたマダガスカル人の大学院生から Facebook のチャットアプリである Messenger に「私たちが調査している森林が燃えている」と連絡が入った。私たちがいつも歩いている森が燃え、キツネザルやヘビが焼け出されて死に絶えている様子がわかる写真も同時に送られてきて、唖然とした。国際電話や SNS を駆使しながら消火活動への助言をしつつ、私たちは渡航を決断した。本稿はこれまで 20 回の渡航行で最も苦労したコロナ禍での渡航について、往路編と復路編に分けて報告したい。

【日本国内での準備】

外務省の海外安全情報配信サービスアプリである「たびレジ」経由で入ってくる在マダガスカル日本国大使館の情報とマダガスカルで旅行代理店 ARICS 社の黒川廉社長に連絡を取りながら、2021 年 10 月後半から本格的にフライト情報を集め始めた。ちょうど 10 月 23 日にモーリシャス航空が、11 月 6 日にはエールフランスがアンタナナリヴ発着の旅客機の運航を再開するタイミングだった。京都大学からは私を含めて 3 人が渡航する。久しぶりの渡航で、研究資材の持ち込みも大量に予定していたため（3 人で 300kg を超える）、預け荷物の追加が事前に予約できるエールフランスに的を絞った。大学もすっかり海外派遣に臆病になってしまい、渡航する前の月の会議で渡航理由を説明し、承認される必要があった。11 月中旬の会議での審議を通し、12 月中旬での渡航となる。会議での審議のためにフライト情報や新型コロナウイルス感染症に罹った場合の緊急連絡先や現地協力者の連絡先、利用を受けられる病院の情報などを資料にまとめた。日本国内では 7 月から 9 月にかけてデルタ株が猛威を振るった第 5 波が収まっており、大学ではそろそろ誰かが先陣を切って渡航のための面倒な資料を作り、後続はそれを参考に渡航準備をする機会をうかがっていたのだが、私たちがその先陣を切ることになってしまった。11 月上旬時点で、フライトの見積額は 48 万円だった。コロナ禍の最中のエールフランス便なので、通常時よりかなり高いが仕方がなかった。しかしながら、大学での審査が通るまでは予約を確定できなかった。

その間に予想だにしていなかった事態に陥ってしまう。アフリカ大陸南部でのオミクロン株の流行である。マダガスカル政府は 11 月 27 日に南アフリカからの出入国やモーリシャス航空の離発着を停止すると発表した。これによってマダガスカルに入国する手段はいよいよエールフランスに限られ、クリスマス休暇にマダガスカルに入国する乗客が殺到したのか、数日で残席がわずかになってしまった。結局、待ちに待った大学での審議が通ったタイミングで、59 万円にまで高騰した航空券を購入する羽目になった。その後も連日のように日本政府も水際対策強化・変更の発表を行っており、私たちのフライトもいつ停止されるかわからない状況だったが、マダガスカル政府がエールフランスの運航を停止することはなかった。

航空券が確定するとアンタナナリヴのホテルを予約する必要がある。マダガスカル政府が認可している入国後の旅行者を対象とした隔離ホテルの一覧がウェブサイトで紹介されており、私たちがこれまで利用したことのあるホテルは大体リストアップされていた。イバト（Ivato）国際空港の入国検査では、隔離ホテルでの宿泊予約と 2 日間以上の宿泊料の支払いを証明する書類の提示が必要だった。ARICS にお願いしていつも利用しているホテル上海を予約してもらい、これらの書類を PDF で送ってもらった。空港からホテルへの送迎も、一般車での移動は認められず、隔離ホテルの送迎車を利用することになっていた。

ひとり 100kg 近い荷物を関西国際空港（関空）まで運ぶ際、普段なら数千円の乗り合いの空港送迎シャトルバスを利用していたのだが、コロナ禍での乗り合いバスは運行を停止しており、13800 円の空港送迎タクシーを利用することになった。さらに、出国前 72 時間以内に PCR 検査を受け、英語でのコロナ陰性証明を発行するのに 35000 円の出費となった。さすがにコロナ関連での書類作成や出費が重なり、金銭感覚が狂ったような思いに陥りながら荷物をまとめ、空港に向かった。

【航空機での移動】

12 月 12 日の朝、2 年ぶりに訪れた関空はガラガラだった（写真 1）。土産物やレストランなど、多くの店は休業中でチェックインの作業だけが淡々と進んでいった。パリ行きの機内に乗り込むと私たち以外にほとんど乗客がおらず、あれだけ神経を使っていた機内感染のリスクなどはほとんど感じなかった。出国準備で徹夜が続いていた私は、4 列並んだシートを独り占めし、久しぶりに寝ることができた。パリでは 1 泊するのだが、シャルル・ド・ゴール空港から出てしまうと日本出国前の陰性証明の効力が切れてしまうため、空港内のホテルに泊まる必要があった（狭い部屋にベッドしかないのに 1 泊 23000 円…）。ところが、空港内の店はほとんど閉まっていたために仕方なくコンビニ弁当を購入し、空港のベンチの上で夕食をとった。久々のパリも、味気ない滞在となった。

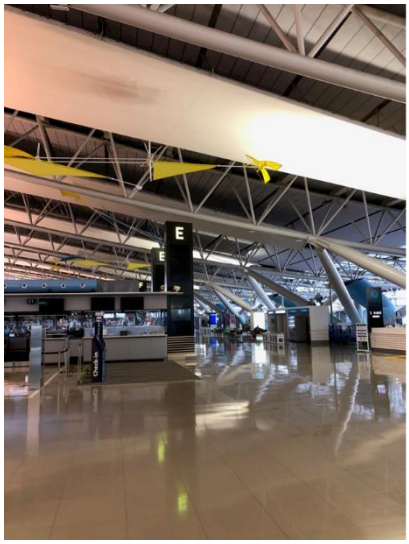


写真 1．出国当日の関西国際空港（左）と同空港を離陸した機内の様子（右）
閑古鳥が鳴く状況で感染リスクはほとんど感じなかった。

翌朝（12 月 13 日）、アンタナナリヴ行きの搭乗口に向かう。乗客時にコロナ陰性証明を確認する空港スタッフも世界中の様々な証明書を確認するのに疲弊しており、私が苦労して取得した証明書も「Negative」の文字を確認しただけだった。このフライトのためにチケット代が高騰したのだから予想はしていたが、機内に乗り込むと満席でびっくりした。同時刻に食事が配られ、乗客が一斉にマスクを外して口を開ける光景にはさすがに感染リスクを感じる。私はマスクを外さず、周りと少し時間をずらして食事をとるなどのわずかにできる工夫をした。

夜中の 24 時、イバト国際空港に着陸する。この時に重要なのはできるだけ早く降り、速く歩いて入国審査の列の前の方に行くことである。はじめに迎えるのは入国時の PCR 検査に対する支払いで、25 ユーロを支払うと領収書と検査待ちの整理番号をもらう（写真 2）。同時に査証の有無を確認され、取得していない場合は Arrival Visa を購入することになる。私たちは出国前に駐日マダガスカル大使館から調査用の査証を取得していたので、この工程はスキップできた。電光掲示板に整理番号で呼び出されるまでは、ベンチにて待機する。自分の番号が表示されると、同時に表示される番号の検査ブースまで移動する。ブースには白衣を着た若い女性 2 人が座っており、検査の領収書と整理券、パスポートとアンタナナリヴの隔離ホテルの予約証明書などの提示が求められた。その後、細い綿棒を鼻に入れられ（結構痛い）、検査は終了した。検査結果は、2-3 日後に隔離ホテルに通知されることになっている。その後、通常の入国審査官によるパスポート等の確認を受けて、預け荷物の受け取り会場に入る。

写真 2. PCR 検査代を支払うブース

預け荷物は通常、ベルトコンベアに乗って流れてくる荷物を乗客自身が取りに行けるのだが、今回はベルトコンベアの前に立ち入り禁止の柵が立てられ、それより先のベルトコンベア近くに複数名の制服をきたポーターが乗客とコミュニケーションを取りながら荷物を取りに行ってもらうシステムになっていた（写真３）。その会場は熱気に包まれ、「3 密」そのものだった。私たちは 3 人で 300kg 以上、約 20 個もの荷物を預けていたが、今回のシステムを知り合いの研究者から事前に情報を得ていたので、入念に作戦を練っていた。私たちの荷物には「KU1, KU2,…」と一つ一つに Kyoto University の略である KU の通し番号を大きく書いたり、養生テープに書いて貼ったりしていた（写真４）。さらにそれらの荷物の写真を撮り、A4 用紙に印刷していった。ポーターの一人を呼び、この用紙を渡してすべて探すようにお願いした。私たちの専属ポーターのようになるわけだから、当然チップを要求される事は想定内だった。この作業は私たちの調査隊にとって重要なので感謝をしながら合意に至った。ところが 300kg の荷物を集めるのは予想外に重労働で、1 時間以上かかった。契約したポーターも意地になってすべての荷物を探し出してくれた。結局このポーターは追加のチップを要求しつつ、その後の税関職員による荷物審査にも付き合ってくれて、とても助かった。

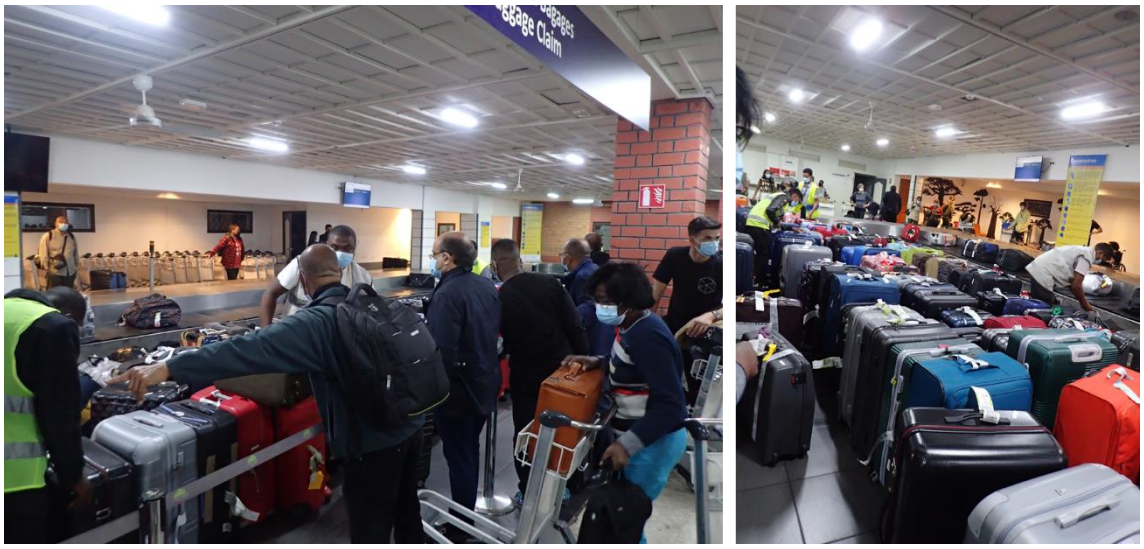


写真 3. イバト国際空港で預け荷物を受け取る様子
空港のポーターに指示を出す乗客（左）とベルトコンベアから降ろされた荷物を整理するポーター（右）

写真 4. 番号を書いたり貼ったりした預け荷物

結局、大量の荷物のせいでこの便の乗客の中でも後の方になって入国することになった。いつもは入国直後にイバト空港内で換金するのだが、換金所をふくむ全ての店舗が閉鎖しており、私たちの名前を掲げるホテル上海の送迎車ドライバーのもとにまっすぐ向かった。その後は大量の荷物を車に積み込むのに少し手間取ったが、ホテルまでの移動は順調で、深夜 3 時ごろに無事にチェックインした。ホテル上海の受付は閉まっていたのだが、警備員は 24 時間働いており、彼らから部屋の鍵を受け取る。私たちは長時間フライト後の入国審

査や荷物の持ち運びでヘトヘトに疲れていて、喉がカラカラだった。警備員に「ビールが欲しい」と無茶なお願いをしてみたのだが、アナラケリ（Analakely）市場までのお使いを快く引き受けてもらい、朝 4 時ごろに 2 年ぶりの THB で喉を潤すことができた。

【入国後のホテル隔離】

4 時間後の朝 8 時、とりあえず 1 階のロビー兼レストランに行くと宿泊客が通常どおり朝食をとっていた。私もオムレツとコーヒーを注文して普通に朝食を食べることができた。ホテルのオーナーがいたので隔離期間の過ごし方などを聞いてみると、「他のホテルだと自室での食事をとることになるが、ホテル上海ではそこまで宿泊客の行動を制限していない。ただし、隔離期間中の外出や知人をホテルに呼んで交流することは禁止している。」とのことだった。ホテル滞在の初日はホテルのネット回線を使いながらマダガスカルの協力者と連絡を取り、買い物のお使いの依頼や調査書類の作成などを始めることにした。ホテル滞在の 2 日目、私たちが朝食を食べているとホテルのオーナーがやってきて、「おめでとう、あなたたちは陰性だと当局から連絡があったよ。」と告げられた。隔離期間は実質 1 日で、思ったより早く解放された。

私たちはすぐにアンタナナリヴの街に繰り出し、アンタナナリヴ大学への訪問や換金、物資の調達などに取り掛かった。アンタナナリヴではほぼすべての人がマスクを着用しており、スーパーや役所では入口に消毒用アルコールが設置されていた。マスクをポケットに入れたまま、未着用で歩いていると交通整理の警官に笛を吹かれてマスクの着用を指示された。また、アンタナナリヴ大学を訪れた際も教員や学生のマスクのデザインがオシャレで、私が訪れた研究室では先生がアロマオイル入りのアルコールジェルを私たちの手に噴きかけて、とても良い香りを楽しみながら打ち合わせをしたのを覚えている。アンタナナリヴの人びとは前向きに感染予防に取り組んでいる印象を受けた。

アンタナナリヴで 4 日間滞在した私たちは大型バスを 1 台借り上げてアンカラファンツィカ国立公園に向かった。早朝に出発して、夜の 7 時半ごろに国立公園の最寄りの町・アンドラヌファシカ（Andranofasika）に到着して、待ち合わせした調査助手たちと 2 年ぶりの再会を喜んだ。地方ではマスクを着用している人はとても少なく、マスクをしていると「お前はコロナに罹っているのか？」と言われる。私たちは入国時に陰性を確認し、さらに数日間発症しなかったので新型コロナウイルス保有者である可能性は低い。そのため、アンカラファンツィカでの調査期間はマスクを着用しなくなったのだが、マスク無しの生活も 2 年ぶりで、マスク無しに空気を吸い、人の表情を見ながら働く贅沢な時間を過ごすことができた。次にマスクを着用したのは 1 月 9 日のアンカラファンツィカにおける調査を終えて、アンタナナリヴに入る道中だった。そこから帰国に至る体験については次回の記事で報告させていただく。

生き物図鑑　26

アイアイ

【本文】佐藤　宏樹　（京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科）
【写真】田中　ちひろ（仙台市八木山動物公園フジサキの杜）

【和名】

アイアイ（霊長目、アイアイ科、アイアイ属）

【学名】

Daubentonia madagascariensis Gmelin, 1788

【マダガスカル名】

haihay / aiay / ahay

【名前の由来】

この動物の名前を尋ねた外国人が、マダガスカル語の“heh heh”（haihay）「私はよく知らない」という現地住民の言葉を「アイアイ」と聞き取った音が名前になったとの説（Simon & Meyers 2001）が流布している。この説によるとマダガスカル人にとっては黒くて奇怪な本種は不吉な動物として忌み嫌われていることから、名前を聞かれても「私はよく知らない」と答えたのだろうとされている。ただし、この説には言語学上疑わしい点があり、鳴き声に由来するとの説（Richardson 1885）を含め、名前の由来は確定していない。

【分布】

マダガスカル東部降雨林、サンビラヌ（Sambirano）湿潤林、およびマダガスカル西部乾燥林の一部（Mittermeier et al. 2010）。

【形態的特徴】

体重 2.5 kg ほどで、白髪が混ざったような黒くて長い体毛に全身が覆われている。3 次元で音源の位置を聞き分ける大きな耳（Ramsier & Dominy 2012）や（写真１）、げっ歯類のように一生伸び続ける門歯（Morris et al. 2018）、細くて長い前肢の第 3 指（中指）（Soligo 2005）など、霊長類の中でも極めて奇怪な形態を有している（写真１,２）。こうした形態的特徴と単独で夜間に活動するという生態が「不気味」というイメージにつながり、ある地域では見た者に病気や死などの災いをもたらす動物だとされて忌み嫌われ、見たら殺して吊

るし上げるという文化まで確認されている（Simon & Meyers 2001）。また、他の地域では森林で遭遇しただけでは殺さず、村内に侵入してきた場合に「災いをもたらす」とされ、特別な儀式を経たうえで殺すという習慣もある（深澤秀夫 私信）。

【生態的特徴】

アイアイは夜行性で、通常は単独で活動するが、2-3 個体が集まって採食することもある。食性は雑食性で、果実や種子、昆虫、卵など様々な食物を採食する。ラミー（*Canarium madagascariensis*）という大きな果実に対しては、内果皮が硬化した核を門歯でかみ砕き（写真３左）、中にある種子部分を細い中指で掻き出しながら食べる（Iwano & Iwakawa 1988）。大きな木の幹を見つけると大きな耳を近づけながら中指でコツコツとタップし、幹の中に虫の幼虫が潜んでいることを察知すると門歯で幹に穴をあけて（写真３右）、中指で幼虫をほじくりだして食べる（Sterling 1994, Erickson et al. 1998）。保護構造が発達した種子を食べるニッチはリスに似ており、幹をタップしながら穴をあけて虫を食べるニッチ（ある生物種が利用する資源や空間、時間などの生態的地位。ここでは種が占める餌資源を指す。）はキツツキに似ている。アイアイが「リスかキツツキ、どちらのニッチをマダガスカルで占めているのか」という問いに関しては議論が続いてきた（Cartmill 1974, Iwano 1991, Sterling 1994, Erickson et al. 1998）。門歯が発達している一方で臼歯の数が少ないことから、硬いものに保護された柔らかくて高品質な食物をターゲットとしていると考えられ、キツツキのニッチに近いと考えられている(Sterling 1994, Erickson et al. 1998, Boyer et al. 2021）。

繁殖は他のキツネザル類と異なり、アイアイは季節に関係なく不規則にメスが発情する。メスは他のメスと重複しない 30-40 ha の遊動域をもち、発情すると夜間に鳴き続ける。鳴き声をあげ続ける発情メスを求めてオスが集まり、メスは複数のオスとの交尾を繰り返す（Sterling & Richard 1995）。オスは複数のメスとの交尾をできるように広大な範囲をさまようため、その遊動域は 100-200 ha にも広がる（Sterling 1993）。こうした行動記録から、アイアイは乱婚の婚姻システムをもつとされている。メスは 2-3 年に一度、1 個体の仔を生む。

【系統分類学における見解】

多くの読者がご存じであろうアイアイをあえて本稿で取り上げたのは、アイアイの系統分類学上の位置づけを見直す最近の研究成果が大きな話題となっているからである。アイアイ科で唯一の現生種であるアイアイは形態や生態が特殊であり、その系統分類学上の位置づけは 1 世紀以上も議論が続いてきた。分子生物学や形態学の発展に伴い、アイアイはアジアやアフリカに生息するロリス科やガラゴ科よりもマダガスカルに生息する 4 つの科（コビトキツネザル科、キツネザル科、イタチキツネザル科、インドリ科）との類似点が多いため、マダガスカルに生息する 5 科は霊長目曲鼻半目キツネザル形下目のグループを構

成すると認識されてきた（Yoder et al. 1996, 図 1 a）。またアフリカ大陸とマダガスカル島を最短の幅 400 km を隔てるモザンビーク海峡やその間を流れる海流の向きや速度などを考慮すると、キツネザル類の共通祖先は始新世初期までにたった一度だけ漂流物に乗ってマダガスカル島に到達し、その後に多様なキツネザル類へと適応放散したとする単系統仮説が提唱・支持されてきた（Ali & Huber 2010）。つまり、「アイアイはキツネザルの一員である」という見解が定説となっているのである。

ところが 2018 年、ケニアやエジプトから出土した原始霊長類（*Propotto leakeyi* および *Plesiopithecus teras*）の化石の形態を分析したところ、発達した門歯や貧弱な臼歯を持つことがわかった。形態および遺伝子レベルの情報を解析した本研究では、これらのアフリカ産原始霊長類は現生の霊長類では櫛のような前歯を持つアイアイ以外のキツネザル 4 科よりもげっ歯類のような門歯をもつアイアイ科に近縁であると位置づけられた（Gunnell et al. 2018）。これによってアイアイはキツネザル形下目からはずれ、アフリカの原始霊長類とアイアイ形下目（Chiromyiformes）という別の下目にまとめられることが提唱されている。この研究成果に基づくと、アフリカ大陸でキツネザル形下目とアイアイ形下目が分岐し、アイアイ形下目の共通祖先からは *Plesiopithecus* がはじめに分かれて、そのあとに *Protto* とアイアイ科に分かれた。アイアイ科の祖先は漸新世にマダガスカル島に移入したとされる（図 1 b）。その後、アイアイ科は現生のアイアイとジャイアントアイアイ（*Daubentonia robsuta*）に分岐したが、後者はおよそ 2000 年前に絶滅している。一方、キツネザル形下目の共通祖先は中新世にマダガスカルに到達し、7 科にまで適応放散したのち、3 科（体サイズの大きなジャイアントリーマーとよばれるキツネザル）が絶滅して現在の 4 科が残ったとされる。この研究は「アイアイを含むキツネザルは単系統である」とするこれまでの定説を覆し、「アイアイはキツネザルではない」という新たな見解を投げかけている。この新仮説の真偽を確かめるには、アフリカやマダガスカルから出土する原始霊長類の化石を対象としたさらなる研究が必要だろう。

参考文献

Ali, J.R. & Huber, M. 2010. Mammalian biodiversity on Madagascar controlled by ocean currents. ***Nature*** 463: 653-656.

Boyer, D. M., Schaeffer, L. M. & Beard, K. C. 2021. New dentaries of Chiromyoides (Primatomorpha, Plesiadapidae) and a reassessment of the "mammalian woodpecker" ecological niche. ***Geobios*** 66-67: 77-102.

Cartmill, M. 1974. *Daubentonia*, *Dactylopsila*, woodpeckers, and klinorhynchy. In Martin, R. D., Doyle, G. A. & Walker, A. C. (eds.) ***Prosimian biology***. Duckworth. Pp 655-670.

Erickson, C. J. et al. 1998. Percussive foraging: stimuli for prey location by aye-aye (*Daubentonia madagascariensis*). ***International Journal of Primatology*** 19: 111-122.

Gunnell, G. F. et al. 2018. Fossil lemurs from Egypt and Kenya suggest an African origin for Madagascar's aye-aye. ***Nature Communications*** 9: 3193.

Iwano, T. 1991. An ecological and behavioral study of the aye-aye (*Daubentonia madagascariensis*). ***African Study Monographs*** 12: 19-42.

Iwano, T. and Iwakawa, C. 1988. Feeding behaviour of the aye-aye (Daubentonia madagascariensis) on nuts of ramy (*Canarium madagascariensis*). ***Folia Primatologica*** 50:136–142.

Morris, P. J. R., Cobb, S. N. F. & Cox, P. G. 2018. Convergent evolution in the Euarchontoglires. ***Biology Letters*** 14: 20180366.

Mittermeier, R. A. et al. 2010. ***Lemurs of Madagascar***, 3rd edn. Conservation International.

Ramsier, M. A. & Dominy, N. J. 2012. Receiver bias and the acoustic ecology of aye-ayes (*Daubentonia madagascariensis*). ***Communicative & Integrative Biology*** 5: 637–640.

Richardson, J. 1885. ***A New Malagasy-English Dictionary,*** London Missionary Society.

Simon, E. L. and Meyers, D. M. 2001. Folklore and belief about the Aye aye (*Daubentonia madagascariensis*). ***Lemur News*** 6: 11-16

Soligo, C. 2005. Anatomy of the hand and arm in *Daubentonia madagascariensis*: a functional and phylogenetic outlook. ***Folia Primatologica*** 76: 262–300.

Sterling, E. J. 1993. Patterns of range use and social organization in aye-ayes (*Daubentonia madagascariensis*) on Nosy Mangabe. In Kappeler, P. M. and Ganzhorn, J. U. (eds.) ***Lemur social systems and their ecological basis***. Plenum Press. Pp 1-10.

Sterling, E. J. 1994. Aye-ayes: specialists on structurally defended resources. ***Folia Primatologica*** 62:142–154.

Sterling, E. J. & Richard, A. F. 1995. Social organization in the aye-aye (*Daubentonia madagascariensis*) and the perceived distinctiveness of nocturnal primates. In Alterman, L., Doyle, G. A. & Izard, M. K. (eds.) ***Creatures of the dark: the nocturnal prosimians***. Plenum Press. Pp/ 439-451.

Yoder, A. D., et al. 1996. Ancient single origin for Malagasy primates. ***Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*** 93: 5122-5126

写真 1．アイアイの顔．（撮影：佐藤宏樹）
首都アンタナナリヴ（Antananarivo）のチンバザザ（Tsimbazaza）動植物園に飼育されている個体を撮影した。コウモリのような大きな耳がめだつ。

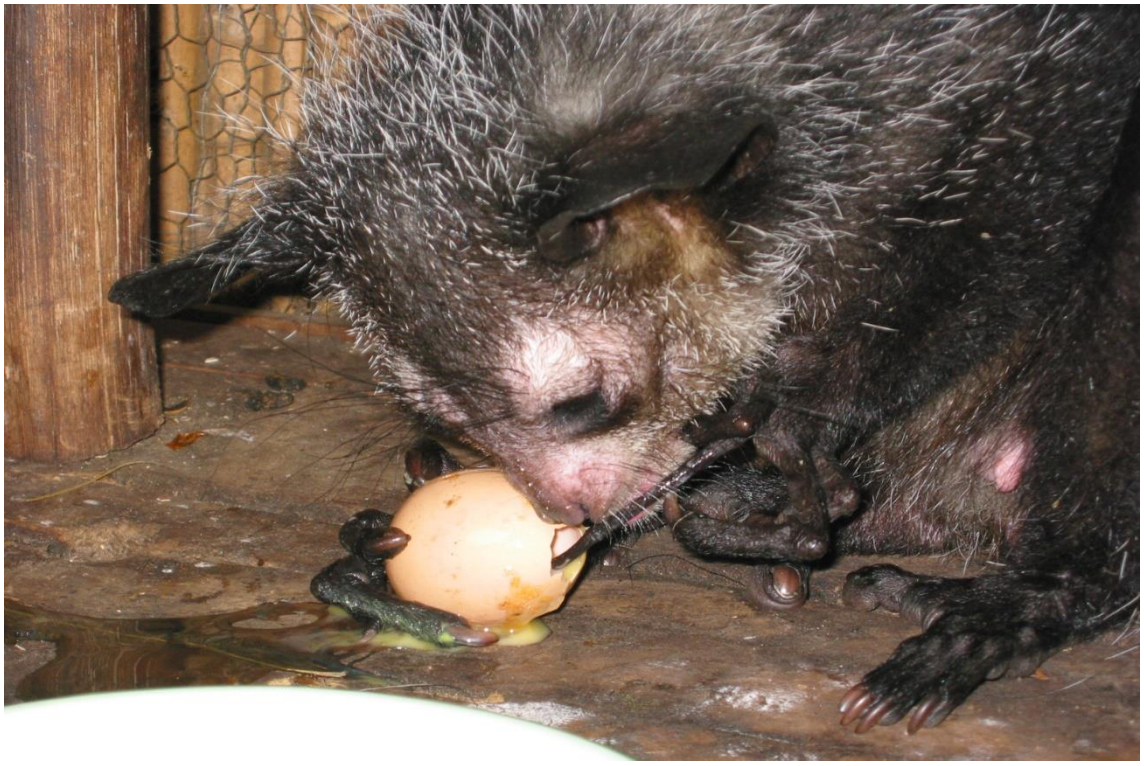
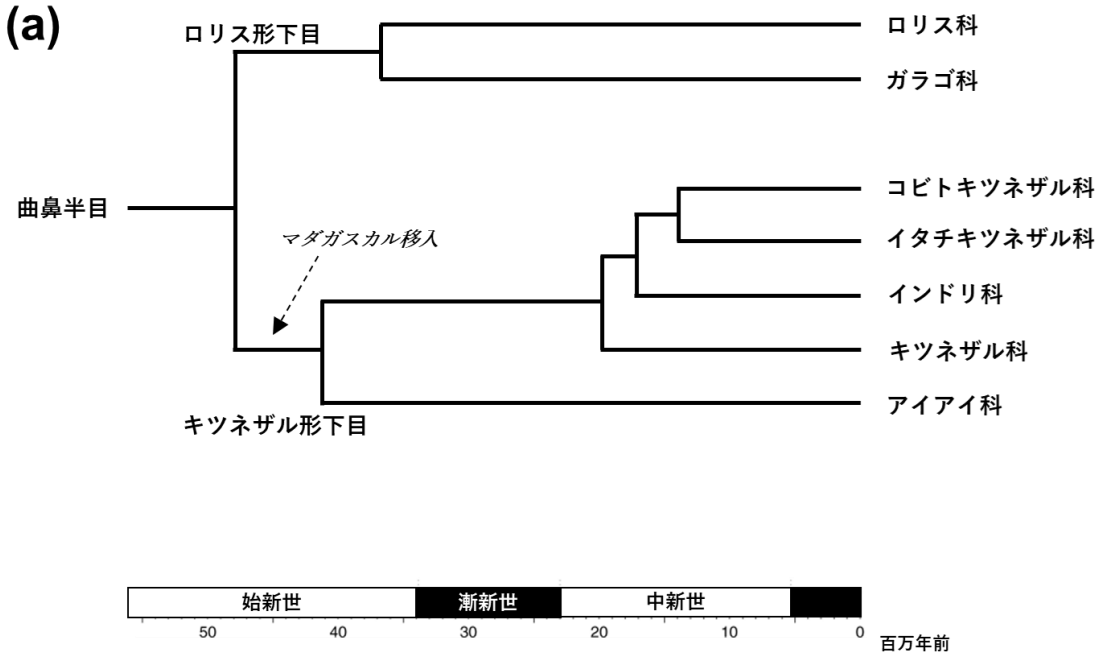


写真 2．生卵を食べるアイアイ（撮影：田中ちひろ）

チンバザザ動植物園の飼育個体に生卵を与えると、前肢の細い第３指で中身をほじくりだすようにして食べる。

写真 3．野生個体の生息地アンジアマンギーラナ（Anjiamangirana）の森林で観察されたアイアイがラミーの果実（左）および木の幹内の昆虫を食べた痕跡（撮影：田中ちひろ）．どちらも硬い内果皮（核）や木の幹を噛み破った門歯の強い咬合力を示している。



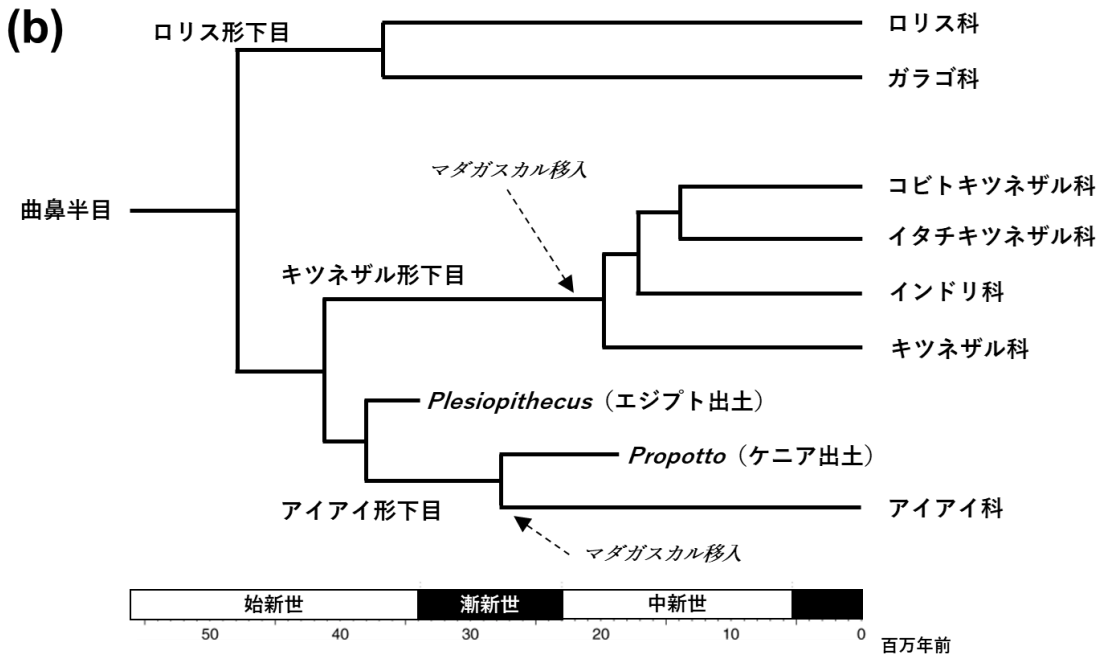


図 1．従来の仮説および新仮説による曲鼻猿類（曲鼻半目）の系統樹の比較．(a) アイアイをキツネザル形下目に位置付ける分類体系．(b) アイアイをアイアイ形下目に位置付ける分類体系．系統樹の分岐年代は Gunnell et al.（2018）による推定に従って作図した．

Moi et Madagascar vol.26

私とマダガスカル

絵・文
元青年海外協力隊
マダガスカル隊員石田

FO.FA.MA 聾唖学校（Antsirabe）

トウモロコシはマダガスカルで、稲に次いで広く栽培されている作物の一つです。道端では女性が七輪（fatam-pera）でトウモロコシを焼いて、販売している事もあります。残念ながら、あまり甘くはないのですが、日本が懐かしくてよく購入したものです。

ところである日、私の配属先のアンチラベ（Antsirabe 首都の Antananarivo から南西約 170km）の FO.FA.MA 聾唖学校に活動に行くと、その日の授業はなく、「今日はトウモロコシの種を蒔く」とのこと。学校が全寮制で敷地はとても広く、その中にトウモロコシを植え付けるということでした。

中高生ぐらいの年齢の男子生徒が集められ、鋤（angady）を持って、雑草が生えている場所を耕し始めました。「かなり広い土地なので、大変だな」と思って見ていると、男子生徒達がすごい勢いで耕し、その止まらない勢いと速さといったら、まるで動画の早送りのようで、あっという間に土がふわふわに耕され、ビックリしました！

申し訳ないことに、私と女生徒は種を蒔いただけでした。マダガスカルの男子は、土仕事に慣れているのだなぁと、とても感心した一日でした。

マダガスカルのことわざいろいろ　29

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　深澤　秀夫

Hianao voalavo mamono vary ; izaho totozy mitsimpona ny raraka.
[W.E.Cousins et J.Parret, *Ohabolan'ny Ntaolo*, Mémoires de L'Academie Malgache Fascicule XLIV, Tananarive:Imprimerie Nationale, 1972: 556.]

Hianao voalavo mamono ny vary, izaho totozy mitsimpona ny raraka.
[Estine Rinara Soa, *Ohabolana Malagasy* , Antananarivo: Librairie Mixte, 2006: 87.]

直訳：「あなたがコメを食い荒らすネズミなら、私はおこぼれのコメに与るハツカネズミです」

意訳：「五十歩百歩」・「どっちもどっち」

hianao は、二人称単数「あなた」を示す ianao の 19 世紀頃までの表記です。と言う事は、現在 ianao と発音されている「あなた」ですが、19 世紀頃までは hianao と発音されていた事を表しています。フランス語の無声の h とは異なり、マダガスカル語における h – は有声音ですが、一般的に弱音のため、聞き取りの難しい場合が多々あります。そのため、次第に h – が慣用的に欠落して表記されるに至ったのかもしれません。現在進行形の同様な事例として、「忘れられる」を意味する hadino があります。この語頭の h が弱音のため、多くの人が adino と表記するようになりつつある一方、辞書の上では依然として hadino と綴られています。

voalavo は、「ネズミ」を広く指す単語です。マダガスカルでは屋内にも戸外にも野外にも、ネズミが多く生息しています。そのため、マダガスカルは、WHO（世界保健機関）指定のペスト汚染国となっており、その根絶はたいへんに困難なようです。一方、後で出てくる totozy はハツカネズミを意味し、通常のネズミとハツカネズミとは異なる語彙により明確に区別されています。

mamono は、「殺す」を意味する日常でもたいへんによく用いられる他動詞です。このことわざの場合、「殺す」対象が vary、すなわち「稲・コメ」ですから、「だいなしにする」あるいは「食い荒らす」くらいの訳が妥当です。mamono afo「火を殺す」と言えば「火を消す」事ですし、mamono teny「ことばを殺す」は「ことばを遮る」ですし、 mamono feo「音を殺す」は「息を呑む」 となります。ny は、マダガスカル語の定冠詞です。

vary は、「稲」もしくは「コメ」を指す名詞です。raraka は、「こぼれる」・「飛散される」を意味する語根受動態です。miraraka ny orana と言えば、「雨がぽつぽつと降る」様を表します。このことわざの場合、ny raraka と定冠詞が付置していますので、こぼれた物を指す、「おこぼれ」となります。mitsimpona は、tsimpo を語根とする動詞で、「一つずつ拾い集める」行為を指します。ですから、このことわざにおける mitsimpona ny raraka を直訳すれば、「(コメの) おこぼれを拾い集める」となります。

このことわざにおいては、ネズミとハツカネズミとが対照され、そこに前者の「コメを食い荒らす」行為と後者の「コメのおこぼれを拾い集める」行為とが重なり合わされています。マダガスカルの人びとにとって、通常のネズミはコメを食い荒らす害獣との認識が強い一方、ハツカネズミにはその肢体故に愛らしさを感じるようです。それ故、両者の対比に、このことわざの面白さと巧みさが潜んでいます。収穫されたコメを大量に食べるネズミにせよ、少量しかコメを食べないハツカネズミにせよ、マダガスカルの人びとにとって大事な主食であるコメを食い荒らしている事実に変わりはないわけですし、ハツカネズミと雖も多数となれば、結果はネズミと同じ事になります。

実際にマダガスカルの農村においては、収穫後のコメの貯蔵はネズミの食害との戦いです。東海岸地方では、穂刈した稲の穂をネズミ返しのついた高床の蔵に貯蔵しています。

他人の行為を引き合いに出して自身の行為の言い訳を戒めるこのことわざ、戦場における兵士の行為ではなく、コメをめぐるネズミとハツカネズミの食害を引き合いに出している点で、たいへんにマダガスカルらしい一句と言えましょう。

日本で作ろう！マダガスカル料理　第 42 回

Sosety sy Henan-kisoa
スセッティ・シ・ヘナンキスア

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　深澤　秀夫

1）用意するもの（3～4 人分）

a. ハヤトウリ	6 個～8 個
b. 豚肉ブロック	500g～1kg
c. トマト	2～4 個
d. 玉ねぎ	1 個
e. ニンニク	半分
f. 生姜	小さいもの半分
g. 塩	少々
h. 食用油	少々
i. 固形スープの素	1 個
j. 包丁	1
k. シチュー鍋	1
l. ヘラ	1
m. 水	500cc

2）料理方法

a.　トマトを四つに切って、へたを取り、種子を指で掻き出し、さらに細かく切ります。皮を剥く必要はありません。玉ねぎの皮を剥いて、細かく切ります。

b.　生姜の皮を剥き、微塵切りにします。ニンニクも同じく皮を剥いて、微塵切りにします。

c.　ハヤトウリの皮を剥き、四つに切り分けます。

d.　豚肉をマッチ箱くらいの大きさに切り分けます。

e.　鍋の底に薄く広がるくらいに食用油を入れ、加熱します。油が加熱されたところで、微塵切りにしたニンニクと生姜を加え、炒めます。ニンニクと生姜に火が通ったところで、玉ねぎとトマトを入れてさらに炒めます。玉ねぎとトマトがしんなりとしたところで、豚肉を投入し、よく混ぜ合わせます。

f.　豚肉に火が通り、色が変わったところで、鍋に水をいれます。次に、塩と固形スープの素、それにハヤトウリを加え、強火で煮立てます。

g.　ひと煮立ちさせた後、1 時間ほど弱火で煮て、水分がほとんど煮飛んだら出来上がりです。焦がさないよう、水分が減ってきた段階で、火加減に注意してください。

3）ここがポイント！

a.　ハヤトウリは肉の脂との相性が良いため、豚肉は腿のブロックよりも、脂肪のついたあばら肉を使うか、あるいは両者を混ぜて用いると良いでしょう。

b.　トマト味が好きでしたら、トマトの量を多めにするか、あるいはトマト缶詰を一缶入れても構いません。

c.　豚肉の味がこの料理の決め手となりますので、国産豚のブランド品を用いた方が、料理完成後の味が良くなります。

スセッティ・シ・ヘナンキスア（sosety sy henan-kisoa）とは、「ハヤトウリと豚肉（の煮込み)」を指します。ハヤトウリは、熱帯南米原産のウリ科の植物です。日本には、大正時代に鹿児島県に持ち込まれて栽培が広がったため、鹿児島地方に住む男性を指した「隼人（はやと）」の名称が冠せられています。

マダガスカル語のハヤトウリの呼び方 sosety は、フランス語の chayote に由来するため、19 世紀末のフランスによる植民地化以降に持ち込まれた栽培食物と思われるかもしれませんが、1888 年に出版された『マダガスカル語－英語辞典』に既にこの単語が採録されています。そのため、ハヤトウリは、19 世紀に貿易や人の往来の活発化したモーリシャスやフランス島（現在のフランス海外県ラ・レユニオン）からもたらされたものと考えられます。

ハヤトウリの実には特有の強い味や香りが無い一方、長時間煮込んでも形が崩れず、また汁をよく吸うため、世界のさまざまな地域の料理で広く使われています。マダガスカルでも首都のアンタナナリヴ（Antananarivo）をはじめとする中央高地地方の都市部の家庭料理において、よく用いられています。どのような肉、とりわけ脂身、との相性が良いため、豚肉と一緒に煮込む事が一般的ですが、牛肉はもちろんの事、羊肉や山羊肉のブロックを入手できるのでしたら、それらとの煮込みもお薦めです。

この日本で、中央高地の家庭の肉の煮込み料理の味に挑戦してみてください！！！

マダガスカル研究懇談会会則

１９９９年　４月　３日制定
２００２年　３月３０日改訂
２００５年　４月　２日改訂
２００８年　３月２９日改訂
２００９年　３月２８日改訂
２０１６年　５月　１日改訂
２０１９年　３月３０日改訂

第一章　総則

（名称）

第１条　本会はマダガスカル研究懇談会（英名：Japan Society for Madagascar Studies、マダガスカル名：Fikambanana Japoney ho an'ny Fikarohana ny momba an'i Madagasikara）と称する。

（目的）

第２条　本会は、マダガスカル島及びその周辺島嶼の自然・社会・文化に関する会員相互の情報交換及び交流を促進し、もってこれらに関する研究の発展に資することを目的とする。

（事業）

第３条　本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

一　懇談会大会の開催
二　電子版による情報の発信
三　前二号に掲げる事業のほか、前条の目的を達成するために必要な事業

第二章　会員

（入会）

第４条　本会に入会しようとする者は、本会が別に定める方法により、入会を申し込むものとする。

（会員の権利）

第５条　会員は次の権利を有する。

一　第３条第一号の懇談会大会及び第１４条の総会への出席
二　第３条第二号の電子版情報への投稿及び寄稿
三　本会の事業活動への参画

（会費）
第６条　本会の会費は、無料とする。
（退会等）
第７条　本会を退会しようとする者は、事務局（第１３条に規定する事務局をいう）に対して退会を申し出るものとする。
２　世話役代表（第９条第一号の世話役代表をいう）は、世話役会の決議を経て、次の各号に掲げる会員を強制的に退会させることができる。
一　第２条に規定する本会の目的に著しく反する行為を行った会員
二　本会の活動を妨げる行為を行った会員
三　本会の品位を損なう等の言動又は行為を行った会員

第三章　役員及び事務局
（役員）
第８条　本会に次の役員を置く。
一　世話役代表　１名
二　世話役　１０名以下
三　会計監事　２名
（役員の任務）
第９条　世話役代表は本会を代表し、会務を総括する。
２　世話役は、本会の庶務、会計、渉外、及び第３条各号に掲げる事業の運営を担当する。
３　会計監事は、本会の財産の状況を監査し、その結果を総会に報告する。
（役員の選任）
第１０条　役員は、会員のうちから総会で選任する。
２　世話役代表及び会計監事は、役員の互選によってこれを選任する。
（役員の任期）
第１１条　役員の任期は２年とし、再任を妨げない。ただし、世話役代表の任期は連続２期を限度とする。
（世話役会）
第１２条　世話役会は、世話役をもって構成し、世話役代表がこれを招集する。
２　世話役会は、次に掲げる事項を決議する。
一　収支決算案及び事業報告案
二　収支予算案及び事業計画案
三　会則の制定、変更又は廃止に関する案
四　役員の任期満了等に伴う次期役員候補の選出

五　前各号に掲げるもののほか、本会の運営に関する重要な事項として世話役会が総会に上程することとした事項

六　本会の運営の実務に関する細則の制定、変更又は廃止

七　事務局（第１３条に規定する事務局をいう）の場所の選定及び事務局員第１３条第２項に規定する事務局員をいう）の選任

八　前二号に掲げるもののほか、本会の運営に関する事項であって、総会の決議を要さない事項

３　世話役会の議事は、出席した世話役の過半数で決する。

４　世話役代表は、第２項に掲げる事項の全部又は一部を決議する必要があり、第１項の世話役会を招集することが困難である場合には、世話役全員に宛てた電子メールその他の通信手段を利用して世話役全員による協議を行い、その過程において世話役全員の過半数が同意の意思表示をした案をもって、当該事項を決定することができる。

５　前項の決定があったときは、当該事項についての提案を可決する旨の世話役会の決議があったものとみなす。

（事務局）

第１３条　本会に、世話役代表及び世話役の会務を補佐する機関として事務局を置き、その場所は、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを定める。その場所を変更する場合も同様とする。

２　事務局に事務局員を置き、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを任命する。

３　世話役代表は、第１５条第２項の規定により第３条第一号の懇談会大会その他の催事の開催にあたり参加費を徴収することとし、かつ前項の事務局員が当該催事に参加する場合には、世話役会の決議を経て、その参加費を免除することができる。

第四章　総会

（総会）

第１４条　総会は、会員をもって構成し、毎年１回、新会計年度開始以後４か月以内に、世話役代表がこれを招集する。

２　総会は、次に掲げる事項を決議する。

一　収支決算及び事業報告

二　収支予算及び事業計画

三　会則の制定、変更又は廃止

四　役員の選任

五　その他本会の運営に関する重要な事項として世話役会が上程した事項

３　総会の議事は、出席会員の過半数で決する。

第五章　会計

（経費）

第１５条　本会の経費は、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。

２　本会は、第３条第一号の懇談会大会又はその他の催事を開催するにあたっては、その都度、世話役会の決議を経て、参加者から参加費を徴収することができる。ただし、第１４条に規定する総会のみに出席する会員からは参加費を徴収しない。

３　前項の規定により参加費を徴収する場合には、世話役代表は、当該催事の開催及び参加費の額を予め会員に通知するものとする。

４　本会は、第３条各号に掲げる事業の実施にあたり、寄付金を募ることができる。

（会計年度）

第１６条　本会の会計年度は、毎年１月１日からその年の１２月３１日までとする。

附　則　（２０１９年3月３０日）

この会則は２０２０年1月１日から効力を発する。

第 26 回懇談会（大会）のご案内

マダガスカル研究懇談会第 26 回大会は、下記の要領で開催されます。事前の参加申込は必要ありません。会員、非会員を問わず、ふるってご参加いただけますようご案内申し上げます。なお、新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、開催中止もしくはオンライン開催への変更になる場合がございます。

日時： 2023 年 3 月 25 日（土）13 時 30 分～（開場 13 時 00 分）

場所：京都大学稲盛財団記念館 3 階中会議室
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
URL: https://www.africa.kyoto-u.ac.jp/contact/access/

会場等の問い合わせ先：マダガスカル研究懇談会事務局（前畑晃也）
メールアドレス：info@madacom.org

プログラム

13:30～ **ご挨拶**
13:40～ **発表 1: 糸井川 壮大**（明治大学農学部農芸化学科）
「味覚受容体の機能から見るキツネザルの食性適応」
14:50～ **発表 2: 江端 希之**（京都大学アフリカ地域研究資料センター）
「マダガスカル・イメリナ地方におけるドゥアニ（王霊・精霊祭祀の社）信仰の生成と発展」
16:00～ **総会**
17:00～ **ポスター発表**
17:15～ **懇親会**（予定）（会場：京都大学稲盛財団記念館 3 階小会議室）

大会参加費： 大人 1,000 円、小人・学生等 無料。会員以外のかたもご参加いただけます。
懇親会参加費： 3,000 円

会場ではポスター発表会も開催します。A0 縦長の大きさ（縦 119cm、横幅 84cm）ていどのスペースを割り当てますので、発表者ご自身でレイアウトと掲示および発表終了後の撤収をしてくださるようお願いします。なお、ポスター発表は、会員の方に限らせて頂きます。

発表を希望されるかたは、2月末日までに、ポスター発表をする旨のメールを下記の2つのメールアドレスまで送り、発表者名とタイトルをお知らせください：

info@madacom.org

edit@madacom.org

申込みが多数に達した場合には、先着順で発表をお受けしたいと思いますので、この点もあわせてご了承ください。会員のみなさまの積極的な応募をお待ち申しあげております。

会場までのアクセス

＊京阪電車

京阪「神宮丸太町駅」の出町柳方面（５番出口）から北へ徒歩４分（鴨川を左手に）

＊ＪＲ／近鉄「京都駅」から：駅北側のバスターミナルにて

（A2)乗り場から　市バス 205/17/4 系統で「荒神口」下車、東へ徒歩４分（荒神橋を渡る）

（C3)乗り場から　京都バス 17 系統（大原方面）で「荒神橋」下車すぐ

＊阪急「河原町駅」から

市バス 59/37/17 系統で「荒神口」下車、東へ徒歩４分（荒神橋を渡る）

＊地下鉄烏丸線「丸太町駅」から

市バス 202/204 系統で「丸太町京阪前」下車、北へ徒歩５分（鴨川を左手に）

京都バス「荒神橋」

原稿を募集しています

SERASERA は、会員間の交流と情報交換を目的としたニュースレターです。広く会員各位からの原稿（文章／表紙写真）を募集しています。

◆　SERASERA は、2020 年 1 月発の 42 号から、紙媒体の印刷物ではなく、マダガスカル研究懇談会のホームページ上で（http://www.madacom.org/news/index.html）電子的に公開されています。SERASERA への投稿・寄稿をめぐるご質問等については、電子メールで編集部宛て（edit@madacom.org）にお問い合わせください。

1. 原稿期限
   毎年、原則 5 月 1 日に夏号の編集を、11 月 1 日に冬号の編集を開始します。この日までに、電子メールで編集部まで原稿をお寄せください（edit@madacom.org）。ただし、文章を書きなれていない方の場合には、編集部とのあいだで通常より多くのやりとりをする場合がありますので、上記の期日よりも早めに原稿をお寄せください。
2. 原稿形式
   文章原稿はマイクロソフト社のワード形式で、写真原稿は JPG 形式でお寄せください。
3. 写真原稿
   表紙写真には、撮影者、撮影場所、撮影年（月日）および 100～300 文字の解説文章を添えてください。
4. 編集の手間を軽減するため、表紙写真原稿ではない一般原稿の場合には、できる限り、投稿者自身が文章原稿に写真を貼りこんで整形したワードファイルを作成し、お送りください。
5. 文章原稿
   分量にとくに制限はありませんが、ひとつの記事の長さは、短いもので 2000 文字ていどを目安とします。掲載希望コーナーの名まえと題名、執筆者名と所属をお忘れなく。文章は、予備知識のない人にも内容と意図が理解できるよう、できるかぎりやさしくわかりやすい表現で書いてください。マダガスカル語の語彙や地名、人名をカタカナ表記される場合には、アルファベット表記も添えてください。アルファベット表記がわからない場合は、編集部にご相談ください。生物についての学術的な原稿の場合は、生物名のラテン学名もできるだけ添えてください。
6. 関連写真・図表
   番号と短いタイトル、必要に応じて 2～3 行以下の解説を付してください。ひとつの記事につき、写真と図表あわせて 10 点ていどを上限とします。
7. 記事の出典（リソース）

自分が直接見聞していない話や、自分が集めたのではない資料については、出典（リソース）を明記してください。また、未確立の学説や根拠薄弱な仮説などが引き合いに出される場合、編集部が根拠や出典などの提示を求めることがあります。引用した文献については、著者名・文献名・出版年・出版社ないし書誌名・掲載ページ（雑誌論文の場合）などを文献リストとして末尾にまとめておいてください。

8. 文章コメント

わかりやすさと最低限の正確さを期するため、編集部が文章に目をとおして、著者にコメントを連絡いたします。ただし、最終的な文責は寄稿者にありますので、編集部からのコメントに従うか従わないかを適宜判断して、手直しをおこなってください。この作業は、原則一回とします。SERASERA の発行主旨や会の活動目的に合致しない記事と編集部が判断した場合には、掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

9. レイアウトの著者校正

夏号の原稿については 6 月中、冬号の原稿については 12 月中に、レイアウトの著者校正をおこないます。この時点では、ページ数が変わるような大幅な変更ができませんので、7. に関わる手直し時までに、納得のいく文章にしあげてください。著者校正の段階で大幅な加筆訂正をされた場合には、編集部が掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

10. 刊行とウェブ公開

夏号は 7 月下旬、冬号は 1 月下旬をめどに電子的に刊行いたします。ただし、編集作業は会員のボランティア作業にもとづいておこなわれていますので、執筆者のみなさまにはその旨よろしくご理解とご協力のほどをお願いいたします。投稿された記事や画像は、マダガスカル研究懇談会のホームページで公開します。

ニュースレター編集方針

- マダガスカル研究懇談会ニュースレターは愛称を「SERASERA」とします。Serasera はマダガスカル語で「交流」を意味し、＜セラセーラ＞と発音します。
- ニュースレターの編集は、世話役と事務局員から構成される編集部によりおこなわれます。
- 編集部員の名前はニュースレター上に開示します。
- ニュースレターは会員からの投稿および編集部が会員と非会員に対し執筆を依頼した原稿を記載し、発行されます。
- 原稿は、会の活動目的に沿う内容とします。
- その上で原稿は、その分野や領域を限定しません。
- 編集部は寄せられた全ての原稿を査読し、その内容が会の活動目的に合致しているかどうか、事実関係についての誤りあるいは文章表現や表記上の誤りや不適切な箇所がないかどうかについて判断いたします。

・　編集部は、執筆者に対し、原稿内容の修正を求めることができます。
・　原稿のニュースレター掲載への最終的判断は、編集部に一任されます。したがって、その内容が不適切であったり、事実関係の修正がなされたりしない場合には、編集部から依頼した原稿であっても、不採用とする場合があります。不採用の理由については、原稿の執筆者に対し編集部から通知いたします。
・　SERASERA に掲載された著作物の著作権はすべて著作者にあり、著作者は SERASERA に掲載された著作物を自由に利用できることとします。ただし著作者は、著作物の複製と公衆送信をマダガスカル研究懇談会に許諾したものとみなします。

2021 年度世話役・事務局・編集部・会計監事

【世話役】飯田卓・市野進一郎・蟹江康光・蟹江由紀・佐藤宏樹・高畑由紀夫・塚原高広（世話役代表）・水田拓・森哲・吉田彰
【事務局】市野進一郎・江端希之・蒲生康重・下家大典・関健次郎・前畑晃也・山田祐
【編集部】飯田卓・市野進一郎・深澤秀夫（編集主任）・前畑晃也・水田拓・山田祐
【会計監事】杉本星子・平野智巳

マダガスカル研究懇談会ニュースレター　SERASERA 第 47 号

発行者　マダガスカル研究懇談会
〒606 - 8511
京都府京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学アフリカ地域研究資料センター内

2022 年 7 月 28 日　発行